

ケン・フォレットの『針の眼』とジャック・ヒギンズの『鷲は舞い降りた』を読んでみた（再読）。どちらもチャーチルとヒトラーが裏の主人公である。英国首相チャーチルとドイツ首相ヒトラーであるが、世界恐慌でチャーチルは失脚したが、ヒトラーが起こした第二次世界大戦によってチャーチルは首相として復活したのである。ヒトラーからの和平案をチャーチルは拒否し、両国の熾烈な戦いが始まった。

『針の眼』は、1944年春第二次世界大戦の連合軍のノルマンディー上陸作戦の裏側を舞台にした本格的なスパイ小説である。「針の眼」と呼ばれるスパイ（鋭利な刃物で刺し殺すのが得意技）が、敵国に潜入して、極秘事項をもって脱出を図る話である。英国内で活動をつづけるドイツのスパイたちは暗号エニグマを連合国側に解読されていたため、次々と捕まってゆく。用心深い「針」は捕まらない。連合国側は上陸地点をノルマンディー以外の地点にカモフラージュしている。「針」はその重大機密（上陸地点はノルマンディー）を入手した。ドイツ中枢（ヒトラーを含め）はどこに兵力を集中されるか迷っていた。「針」が嗅ぎ付けた証拠フィルムが大戦の帰趨を左右する。自らヒトラーに情報を届ける決意を固め、盗んだ漁船で単身、ドイツに向かう。しかし、船は嵐で難破。漂着した北海の孤島に暮らす夫婦（結婚初夜に自動車事故で車椅子生活となった夫とベッドを共にしてもらえない妻）が、「針」の運命に影響を与える。追う立場と逃げる立場の駆け引きや、「針」と島の女とのベッドシーンは、興奮する？本書はチャーチルよりもヒトラーがどう上陸地点を判断するが焦点となる。エピソードで島の女のその後が記されており、それまでの殺伐とした殺戮シーンを忘れさせ、微笑ませてくれる。

『鷲は舞い降りた』（The Eagle Has Landed）は、[ジャック・ヒギンズ](#)による英国の[冒険小説](#)。[第二次世界大戦](#)中の英国領内にある寒村を舞台に、英国首相[ウィンストン・チャーチル](#)の[拉致](#)という特殊任務を受けた、[ナチス・ドイツ](#)落下傘部隊の活躍を描く。「鷲が舞い降りる」とは、降下に成功したことをドイツに伝えるために用いる暗号である。1943年9月に成功した[ムッソリーニ救出作戦](#)から着想を得たようだ。

本書の魅力は主人公のクルト・シュタイナ[中佐](#)やその部下、協力者が人間的に扱われていること（血肉の通った共感できる人物として描いた）である。チャーチル誘拐の使命を受ける契機もシュタイナの人間的なエピソードが基にな

っている（名も知らぬユダヤ少女を助けるために命令に逆らい、部隊ごと[チャーチル諸島](#)へ追いやられ、人間魚雷を操っている早晩戦死する任務を受けていた。その任務を解除されての命令であった。）人間魚雷のような任務も、日本以外でもあったのだろうか。チャーチル誘拐任務完了一步手前で失敗する原因も部下の村民への人間的な対応であった。

実際にはチャーチルはこの誘拐を企画された村には居なかったようだ。しかし、最終章にある挿話を入れることで、こんなこともあったかもしれないと納得できるようになっている。

佐々木譲氏の書いたあとがきに『完全版』は初版において出版社の意向で削除されていたエピソードを復活させたもので、初版よりも主要登場人物の登場場面や描写が増え、また主要登場人物たちのその後を描くエピローグ部分に大幅な加筆が施されているという。読むなら完全版がお勧めである。

1983年ハワイオープンゴルフで青木功が最終日最終ホールでチップイン・イーグルを奪い、劇的な優勝を果たした時、解説者が「The Eagle Has Landed」と叫んだという逸話があるくらい欧米ではこのタイトルは有名なようだ（佐々木譲談）。

この二作は冒険小説の中にあって今でも一、二位を競う名作である。是非、一読を。